

朝日 歌壇 俳壇



〈ウメIV〉 日高理恵子

◆高山れおな選

死の見えて本名明かす寒廓(東京都目黒区) 椿 泰文
 老残は隠さふべしや水面鏡(敦賀市) 中井 一雄
 懐手して懐手されにけり(つくば市) 小林 浦波
 床や家路の子等が聞の声(白岡市) 望月 充丈
 境内にモデル立ちあゐる梅日和(川越市) 大野有之介
 通院はバジヤマにロングコートかな(玉野市) 北村 和枝
 城山に鳥語生まれて春めける(島根県邑南町) 服部 康人
 雪の日もランドゴルフするらし(朝倉市) 深町 明
 初蝶や脇目もふらず金次郎(大分県日出町) 松鷹 久子
 カーテンを引いてびっくり雪女郎(野洲市) 深田 清志

【評】椿さん。「桐島聡容疑者」の一件。少々美し過ぎる詠みぶりだが、作者が抱いた感慨は判る。中井さん。中七は額田王の歌より。意味は原歌と異なり、「隠すことができようか」となる。小林さん。向かい合う二人。笑顔で？ 洗面で？

◆小林貴子選

狩の犬気負い隠さず先に立つ(西海市) 前田 一草
 本名で逝きたる最期冴返る(長野市) 縣 展子
 春闘の旗をたたみて来年少(福岡県鞍手町) 松野 賢珠
 探梅や土地勘のなき停留所(福岡県川崎町) 萩尾 節子
 八ヶ岳白さを競ふ寒天場(東京都世田谷区) 松木 長勝
 臘八や菩提樹下の悟り椅子(広島市) 大林 實
 勿来浜鳥追い小屋の建つ昔(小山市) 泉 洋一郎
 院内の髪染め予約春を待つ(高崎市) 八木千鶴子
 大水柱持ちて勇者となりにけり(岡谷市) 宮澤 羅夢
 外すほど袖引くや針供養(東京都板橋区) 小黒 松男

【評】一句目、狩獵だらしい誇りが詠われ、読者もキリリとした思いになる。二句目、偽名で生きてきた「桐島聡」、その心中や如何に。三句目、何十年も受け継いでいる旗を畳み、また来年少を期する。四句目、梅の花を探し遠くまで来すきた。

◆長谷川權選

裏金の宝船く五人衆(さいたま市) 関根 道豊
 田の神を掃り起さんと春一番(伊万里市) 萩原 豊彦
 これしきが生きた証か冴え返る(つくば市) 小林 浦波
 春の燈の届かぬ深き人の闇(境港市) 大谷 和三
 寒の月出で来大雪警報下(尼崎市) 田中 節夫
 身悶えの如く流水車むかな(苫小牧市) 齊藤まさし
 浜名湖をわたれば故郷初列車(佐賀県基山町) 古庄たみ子
 松明は鬼の大きき追儼の夜(筑後市) 近藤 史紀
 春近しはちきれさうなオムライス(明石市) 榎野 実
 ☆梅一輪窓辺に残し退院す(東京都世田谷区) 百瀬 俊夫

【評】一席。笑いの一撃。世の批判、甘くみるなかれ。二席。まだぐっすりおやすみの田の神さまよ。そろそろ番。三席。いよいよ人生の総決算。誰だつて心をよぎる思い。十句目。病床を慰めてくれた一輪の梅よ。けさ晴れて、さらば。

◆大串 章選

探梅の出発点の無人駅(神戸市) 岸下 庄一
 寒ゆるむ手を振る若きボランティア(川口市) 知念 哲夫
 試歩一歩一歩に日脚伸びにけり(合志市) 坂田美代子
 命継ぐ能登の人々冬銀河(市原市) 高橋 秋市
 無住寺になりし一村雪降り(西東京市) 高橋 秀昭
 山寺の猫可愛がる雪女郎(さいたま市) 齋藤 紀子
 薄氷の水ごと風に揺れてをり(東かがわ市) 桑島 正樹
 日溜りに冬いちご摘む平和かな(名古屋市) 鈴木 修二
 峡深き三村一寺山眠る(北茨城市) 坂佐井光弘
 ☆梅一輪窓辺に残し退院す(東京都世田谷区) 百瀬 俊夫

【評】第1句。無人駅で降り早咲きの梅を探しにゆく。素敵な花に出合えるでしょう。第2句。能登半島地震の被災地でボランティア活動を行う若者たち。頼もしい。第3句。「一歩一歩」と「日脚伸び」が心地好く響き合う。試歩の距離も伸びる。

俳句時評 創作の原動力

阪西 敦子

今回は、二冊の句集を紹介したい。
 岩田奎の第一句集『薔』(ふらんす堂)。2020年に史上最年少で角川俳句賞を受賞した岩田は、この句集で俳人協会新人賞を受賞した。書名は「事物の表面にある、ありのままのグロテスクな様相を写しとること」への思いを含む。「逃水をいふ唇の罅割れて」は、捉えどころのない逃水の発生を伝える人の唇の罅割れに焦点を当て、その瞬間が確実に存在したことを言い留める。同じく「鱈気」を拙いたへ鱈気様はこぼれくるはアジフライ」は海という詩情の一方、親しみのある食べもので現実を実感させる。もう一冊は、佐藤文香の『こゑは消えるのに』(港の人)。佐藤は詩集『渡す手』(思潮社)が中原中也賞に選ばれたばかりだが、この句集は一年間のアメリカ滞在期間の作品をまとめたものだ。「誰かに語って聞かせるほどでもないこと」を受け止める俳句という器が、海外での創作に適したという。タイトルと待たれる。

なつた句へこゑで逢ふ真夏やこゑは消えるのに」は、行き交う声によって表される生命力旺盛な夏にすでに兆す衰退を描き出す。「はつたつた夕日が縦に白樺に」の、はつたつた夕日、白樺は日本でも見られるものだが、空気が広さの違い、環境や視線の変化が、「縦に」という発見を生んだ。小さなことだけれど、それが俳句になった。事物のありのままや、ささやかに価値をおく創作は、これまでも俳句が続けてきたありかただ。その魅力を知り、それを原動力として進む二人。次の創作が待たれる。(俳人)

黒木三千代歌集「草の譜」 約30年ぶりの第3歌集。巻末に未来短歌会の師・岡井隆への挽歌を収録。「偲ぶ会」用の教養借りに来て先生に逢ふ素の先生に(砂子屋書房・3300円) 笹公人著「NHK短歌 シン・短歌入門」52のQ&Aや穴埋め問題などを通し、わかりやすく作歌のコツを伝える。発表前に確認すべき10項目も収録。(NHK出版・1760円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。